

会員の広場



高知、四万十川、足摺岬を旅する

高田 英生（東京）

この春の連休を利用して、家族で高知、四万十川、足摺岬を旅行した。コロナ明けということのほか、天候にも恵まれたこともあって、各観光地は観光客で賑わっていた。

高知市街を一望できる五台山に位置する牧野植物園は、広いうえにアップダウンが多いところだが、若者（学生が目立った。）のみならず年

配の方まで幅広く見学に来られていた。この春始まった朝ドラ「らんまん」の効果だろうか。植物園から一足伸ばしたところにある桂浜、高知観光の定番として、竜馬像とともに有名なが、桂浜の国民宿舎は休業中とのこと、コロナ禍の所為？

高知城の膝元で土佐の名物料理を楽しむ「ひろめ市場」（屋台村）は午前中からごった返していた。定番カツオのたたきやウツボのから揚げを始め、土佐料理を前日楽しんだので雑踏の中匂いを嗅ぐだけで素通りし高知城へ。その後、高知城歴史博物館から竜馬の生まれ育った街を散策した。

翌日は、特急あしずり（JR土讃線・土佐くろしお鉄道）で中村（現、四万十市）へ。豊かな自然の恵みは人々を遠方からも呼び寄

せる。四万十川の遊覧船からは水と緑豊かな景観を楽しむ観光客に加え、釣り人やカヌーで遊ぶ旅行者が見受けられた。日本有数の清流では、アユ、天然うなぎ、手長エビとともに、川海苔なども産する。が、その清流、漁業の維持・保全には洪水対策とともに苦勞されている。船乗り場のすぐ上の道路沿いの崖には氾濫時と思われる日付と水位が白ペンキで記されていた。

更に、レンタカーを利用して足摺岬周辺を観光。土佐清水にあるジョン万次郎資料館では、NHK大河ドラマへの誘致署名を募っていた。江戸から明治にかけ数奇な運命を辿った土佐の傑物の一人に間違いはない。

足摺岬からの遠望は太平洋だけ、どこまでも続く海原に圧倒される。

土佐藩は、上下規律が微妙に緩やかで「幕末

の土佐名物は脱藩」と司馬遼太郎という。牧野富太郎もその自伝に「自由は、土佐の山間部から出る」とまでいわれ、土佐の人々は大に氣勢を上げていた。」と記す。

牧野博士が「繇條書屋」と名付けた書齋に残された数十万点にのぼる標本の遺贈先を、世話になってきた東京大学ではなく東京都立大学としたことには土佐人のかかる心象が想起される。そんな風土の割に、高知龍馬空港の吉田茂に始まり高知駅の駅前広場は勿論、各観光地にはすべからず銅像が建立されている。牧野富太郎もその例外でなく、植物園に建立されていた。

牧野富太郎は、昭和三十二年一月十八日、文化勲章を授与された。練馬区大泉にある牧野記念庭園記念館に勲記が掲示され、時の内閣総理大臣石橋湛山の副署が記されている。